『山月記』を読む

―― 8 世紀中葉の中国を舞台にした物語として ――

長谷川　達 哉

〈キーワード〉中島敦　山月記　国語教育　定番教材

はじめに

2017 年度の第 2 学年「現代文Ｂ」では、中島敦の『山月記』を教材として、この作品を様々な観点から読む、という授業を行なった。佐野幹に『「山月記」はなぜ国民教材となったのか』（大修館書店、2013 年）という題名の著書があるが、全ての「現代文Ｂ」の教科書に『山月記』は採録されていて（「現代文Ａ」についても、5 種類ある教科書のうち 4 種類が『山月記』を採録している）、日本の高校生のほとんどが現代文の授業で『山月記』を学んでいると思われる現状で、「国民教材」という言葉も大げさではない。

特に 1990 年代以降、国語の授業的な『山月記』の読み方・解釈に対する批判が繰り返されるようになったことに佐野幹は言及しているが、2017 年度の『山月記』の授業は、国語の授業において「国民教材」としての『山月記』がどう読まれているのかを確認するとともに、それとは違う読み方を試みようとするものであった。具体的にどのようなかたちで授業を進めたかは、本稿の「あとがき」に述べておいた。また、国語の授業的な読み方とは違った読みの実践ということについては、本稿の第 1 章から第 4 章の内容が、それに相当する。

なお、『山月記』については、以前に「『山月記』の言説分析の試み――人間＝李徴が失ったもの、虎／李徴がたどり着いたところ――」（『中央大学文学部紀要』文学科第 87 号、通巻第 184 号、2001 年 3 月）、「『山月記』再読――科挙の門をくぐった男・李徴の物語――」（『中央大学国文』第 54 号、2011 年 3 月）で論じており、本稿の内容にそれらと重複する部分が少なからずあることをお断りしておく。

第 1 章　李徴はなぜ江南尉という役職を捨ててしまったのか？

「隴西の李徴は博学才穎」で、「天宝の末年」に「若くして名を虎榜に連ね」た男である。「虎榜」とは科挙に合格した者の姓名を掲示する木札であるが、平田茂樹によれば「科挙に合格する

ためには」「厖大な書物の徹底的な暗記」が必要であり、「朝から晩までの受験勉強を十数年間続け、早い者で一七、八歳、多くは二〇歳前後で試験に臨んだ」のだという[(1)]。しかし、「一度で科挙合格を勝ち取ることはまれ」[(2)]で、30代、40代でやっと合格する例も珍しくなかった。では、李徴の場合はどうだったのだろうか。「若くして名を虎榜に連ね」た李徴のことを、語り手は「豊頬の美少年」と形容しているが、この時、李徴はおそらく10代の後半であり、そして彼は一度で合格を勝ち取った男であったに違いない。

「博学才穎」の「儁才」で、「同輩」たちを「鈍物として歯牙にもかけなかった」男、李徴。そんな李徴の「同輩」とは、もちろん李徴と同じ年に「名を虎榜に連ね」た人間たちであり、彼らは唐代の中国社会における超エリートたちである。そんな「同輩」たちに対して、彼らを見下したような、傲慢で尊大な態度をとるのは、李徴が「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚」い男であるからだろうが、それだけではない。「同輩」たちの中には何度目かの受験でやっと合格を勝ち得た者が多くいただろうし、30代、40代で合格した人間も少なくなかったはずである。しかし、「若くして名を虎榜に連ね」た李徴とは、最年少の合格者であり、かつ一度目の受験で、おそらく最も優秀な成績で合格した男だったからこそ、彼は自分が一番優秀であると自負し、「同輩」たちに対して尊大な態度をとることができるのである。

李徴が「若くして名を虎榜に連ね」たのは「天宝の末年」であったが、天宝は西暦で言えば742年から756年までの15年間であり、その末年――天宝14載（755年）の11月には安禄山が挙兵し、12月に洛陽を占拠する。いわゆる「安史の乱」の勃発である。足かけ9年に及ぶこの大乱によって唐王朝の中央集権体制は弱体化していくことになるが、ここで李徴が科挙に合格した「天宝の末年」を仮に天宝14載とし、そこから逆算してみよう。李徴の生まれたのが安史の乱より17～18年前であるなら、それは開元という時代が終わりに近づく頃のことになる。開元は唐王朝の第6代皇帝である玄宗の治世の前半であり、その元号にちなんで「開元の治」と称えられる唐王朝の最盛期であった。

西暦で言えば713年から741年まで29年間続いた開元時代が終わりに近づく頃、李徴はこの世に生を受けたわけだが、時の皇帝・玄宗はやがて名君から暗君に堕していく。「姚崇や宋璟などの有能な大臣を重用し」、「国威」を「おおいに伸張」させた玄宗皇帝[(3)]が、息子・寿王の妃となっていた楊玉環を見初めたのは740年（開元28年）のことであり、この時、李徴はまだ2歳か3歳の幼児であっただろう。「西安郊外の離宮驪山の温泉宮に召されて天子玄宗の寵愛を受けることになった」楊玉環は、5年後の745年（天宝4載）に貴妃の位を与えられる[(4)]が、この頃、李徴は進士に登第することを目指して、朝から晩まで受験勉強にはげむ日々を送っていたはずである。そうして、10年あるいはそれ以上にわたる受験勉強を経て、李徴は「天宝の末年」にはじめて科挙の試験に臨み、合格の栄誉を勝ち取ることになる。

「博学才穎」の「儁才」といえども、科挙に合格するための勉強は並大抵のものではなかっただろう。科挙に合格することは「官僚となる資格を獲得する」ことであり、「通常三年後」に「官吏任用試験を受け」、実際に任官することになる[5]のだが、李徴に与えられのは「江南尉」という役職であった。この時、「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚」い男は、「賤吏に甘んずるを潔しと」せず、「いくばくもなく官を退い」てしまう。その地位を得るために、20年、30年、あるいはそれ以上の年月を受験勉強に捧げる者たちもいるというのに。これからエリート官僚としての人生が始まる、そのスタート地点で、地位や権力や富を手にできる可能性を簡単に捨ててしまった李徴について、語り手は次のように説明する。

……いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。……

のちに商於の林中で旧友・袁傪に詩の「伝録」を依頼するにあたって、虎と化した李徴はこう言う――「他でもない。自分は元来詩人として名を成すつもりでいた」と。しかし、この李徴の言葉を、額面通りに受け取ってよいのだろうか。この問題について検討するためには、李徴が尉として赴任した江南という地域に目を向ける必要がある。江南は長江下流の南側の地域で、蘇州・杭州・紹興・寧波が現代では江南を代表する都市となるが、浙江省杭州市にある西湖は、現代では世界文化遺産に登録された観光スポットであり、ここは白居易が「春題湖上」で「未能抛得杭州去／一半勾留是是此湖」（私は杭州を放り出して帰ることができないでいるが、／私を引き止める、その半分の理由がこの湖なのだ。）[6]と詠じた場所でもあった。「唐も半ばになると江南は人々に親しまれ憧れの気持を抱かせる地域ともなった」と高木重俊は述べ、次のように続ける。

長江流域には、唐代を代表する著名詩人と強く結ばれる地域が、北方と比べてかなり多い。例えば、孟浩然は襄陽、杜甫は成都、李白は廬山・宣城・南京、白居易は廬山・杭州・蘇州、杜牧は揚州というように。孟浩然を除く他の人々にとって、その地は故郷ではないのだが、こうした著名詩人はこれらの地に腰をおろし、風土・歴史、人情・文化に魅かれ、その思いを詩に詠じたのである。彼らの営みが江南の名勝をさらに天下に喧伝したであろうことは疑いがない。[7]

上で高木が名をあげた詩人の一人――李徴より40年近く前に生まれただろう李白（701年～762年）は、開元13年（725年）、25歳の時に長江を下る旅に出て、江南の地を訪ねて

いるが、「いわばこれは、学問・文学の武者修行のようなものであった」と前野直彬は言う。「江南は、唐に先だつ六朝時代に、政治・文化の中心だった地方である。唐になって政治の中心が北へ移っても、ここにはまだ、文化の伝統が生きている。印刷術の発明以前、書物による知識の伝達が困難な当時においては、詩人たちはみずから江南の土を踏み、その地の人に接しなければならなかったのである」[8]。そうであれば、ここでこう問うてみるべきだろう――「元来詩人として名を成すつもりでいた」のであれば、「江南尉に補せられた」ことは千載一遇の好機と言えるのではないか、と。

「江南尉」という役職を「賤吏」と見做し、「いくばくもなく官を退い」てしまった李徴が求めていたもの。それは「詩人として名を成す」ことではなく、政治の世界で自分の能力が高く評価され、自分が政治家としての手腕を振るうことであったに違いない。村上哲見によるなら、唐代の「宰相に至るまでの典型的な出世コース」とは「秘書省校書郎→畿県（首都周辺の県）の尉→監察御史→拾遺→尚書省の員外郎→中書舎人→中書侍郎」[9] というものであった。この「出世コース」の中に「尉」という官職が含まれていることからも分かるように、科挙に合格した者が与えられる役職として、「尉」は決して不当なものではない。「尉」は「賤吏」ではないのである。しかし、「江南尉」という役職が李徴にとって受け入れがたいものであったのは、それが「出世コース」の中にある「畿県（首都周辺の県）の尉」ではなかったからに違いない。

「同輩」たちのことを「鈍物として歯牙にもかけな」い男、自分が誰よりも優秀だと自負している男。そんな男は、自分が「尉」となるならば、それは当然「畿県（首都周辺の県）の尉」であると信じていたはずである。しかし、李徴に与えられたのは、「江南尉」という役職であった。江南は都・長安から見れば遠く東の端に位置する地域であり、「畿県（首都周辺の県）」という範囲から大きく外れている[10]。これは「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚」い男にとって、到底納得のできない結果であり、そのことが「江南尉」を「賤吏」と見做すことにもつながるわけだが、エリート官僚としての人生をスタートさせた李徴の目の前には、もう一つ、面白くない現実があった。それは、一官吏として「膝を俗悪な大官の前に屈」しなければならない、というプライドの高い李徴にとって不愉快な事態である。

例えば、語り手の言葉によって描かれた李徴の人間像をまとめるなら、李徴とは「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く」、「同輩」のことを「鈍物として歯牙にもかけない」男であり、「峻峭」な「性情」で、すぐに人と「衝突」してしまうため、友人も少ない男であった。李徴が自らの人生を省みて語る言葉からキーワードとなるものを拾い上げるなら、李徴とは「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の持ち主であり、自分の中にあった「尊大な羞恥心」という「猛獣」を「飼いふとらせ」てしまった人間である。また、「卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰」ゆえに、自分の「乏しい才能」を「専一に磨」くことができなかった人間であり、「飢え凍えようと

する妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男」でもある。そんな李徴の性格・人間性が、高等学校の国語の授業においては、『山月記』のテーマを考える上で重要な問題となってくる。

小森陽一は多くの教科書（現代文）が「学習の手引き」などで、李徴の性格や人柄について整理させる課題を設定しているのは、『山月記』を学ぶ高校生を一つの読み方へと誘導する仕掛けであることを指摘する。李徴の性格・人間性には様々な問題点があり、それが李徴の悲劇・李徴の不幸につながったのだ、という因果関係を読み取るように、「手引き」の課題は、高校生を誘導しているのである[(11)]。李徴は人間として問題のある男だった、と理解することが、そこでは「正しい」読み方とされるわけだが、それは一面的な捉え方でしかない。では、李徴とはどのような人間だったのかを、教科書の「学習の手引き」的な整理とは違った方向・観点から考察してみることにしよう。

第２章　李徴は虎となるのが相応しい人間だったのか？

姚崇、宋璟、張説、韓休、張九齢といった名臣たちの助けを借り、さまざまな施策で成果をあげ、「開元の治」と称えられる太平の世を築いた玄宗皇帝であったが、李徴が進士に登第することを目指して受験勉強に取り組んでいた間に、楊貴妃への愛に溺れた玄宗皇帝は政治をないがしろにし、政界は腐敗していった。開元２年に奢侈禁止令を発布した玄宗は、元号が変わると、奢侈に溺れ、楊貴妃と遊興にふけるようになっていく。そして開元時代には「「人材登用」と「富国強兵」とをかかげ」、「有能な大臣を重用」した玄宗[(12)]は、天宝時代になると、自分が溺愛する楊貴妃の一族に高い地位を与え、無学ならず者の楊国忠が、貴妃の親族であるがゆえに、中央政府で大きな権力を手にしていくことになる。そんな玄宗皇帝の統治の後期について、中国の歴史教科書はこんなふうに説明している。

天宝年間、唐の玄宗は日増しにおごり、楊貴妃を寵愛し、政事を気にかけなくなった。彼は悪賢い李林甫・楊国忠を宰相としたので、朝政は腐敗し、危機が潜在していった。

唐の玄宗と楊貴妃は終日酒を飲み楽しんだ。楊貴妃は新鮮な荔枝を好み、玄宗は命を下して数千里の外から早馬で宮中まで運びこませた。皇宮にはもっぱら貴妃のために錦を織り、刺繍する工匠が、700 人もいた。玄宗はしばしば貴妃を驪山の華清池に連れていき遊楽した。貴妃の兄弟姉妹も家僕を連れて同行し、車馬が連綿として、前後おしあいへしあいの状態であった。楊家の親族はみな封禄を得て出世した。貴妃の従兄楊国忠は、一身で 40 余りの職務を兼ね、天下を危うくするほどの権力を得た。貴妃の３人の姉が毎年玄宗

のところから得た化粧品代は、100 万を超えた。

その頃、唐の玄宗が重用していた大臣は、すでに賢明で有能な人ではなく、媚びを売ることがうまく、へつらうことに長けた小人の群であった。当時の人が「口に蜜あり、腹に剣あり」と罵った李林甫は、非常にうまく上意に迎合して、玄宗の恩寵を得、十数年も宰相の位に就いた。彼は朝臣が玄宗の前で諫言を進めることを許さなかった。ある日、彼は諫官を召集して言った。「当今の皇上は聖明だから、臣下はその趣旨通りやればよい。みなは口数多く諫める必要はない。おまえたちは立仗馬を見たことはないか。その食べる飼料は三品官の待遇に相当するが、どの馬も宮殿の前で一声いななけば、たちどころに連れ出されて二度と用いられない。あとでこの馬がもういななくのはやめようと思っても、あとの祭りだ」と。ある諫官が李林甫の話を聞かずに、唐の玄宗に上書して進諫した。その翌日から外地に左遷され県令にされた。それ以来、進諫の道は閉ざされ、李林甫は朝政を独占する目的を達成した。(13)

唐の玄宗は、その治世の後期になると、「次第に奢侈に溺れ、政治を怠る」ようになり、毎日、楊貴妃と酒を飲んでは遊興にふけっていた。奸臣の李林甫と楊国忠を寵愛して信任し、宰相の要職を委ね、それにより暗黒政治が展開されるようになった。

楊国忠が官吏を選任するときは、「私邸でこっそり決め」た。彼は権力を一手に握ると広く賄賂を納め、絹布だけでも 3000 万匹にも達した。楊国忠は忠臣や功臣を迫害して佞臣を重用し、自分の言いなりになる者は取り立て、逆らう者は亡き者にした。(14)

李徴が「若くして名を虎榜に連ね」、それによって政治の世界に参入する資格を得た天宝という時代になると、上の引用から分かるように、玄宗皇帝は愚帝と化し、唐王朝の政治は腐敗してしまっていた。李徴が「江南尉に補せられた」のは、安禄山らによる反乱が唐王朝を揺るがしている真っ最中だと考えられるのだが、李徴は「いくばくもなく」エリート官僚としての地位を捨ててしまう。李徴が「官を退い」たことに関して、語り手は二つの理由をあげている。一つは、「賤吏に甘んずるを潔しとしなかった」から。そして、もう一つは、「下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そう」と考えたから、である。江南尉として赴任した李徴の目に、上役たちの姿は「俗悪な大官」と映ったわけだが、では、高い地位にありながらも、下品で、卑しく、醜い官僚とは、どのような人間たちだったのだろうか。

例えば楊国忠との対立から大規模な反乱を起こすことになる安禄山は、辺境地域を視察に訪れる役人を賄賂で籠絡し、やがては玄宗皇帝や楊貴妃に気に入られて、宮廷に食い込んで

行くことになる。そうであれば、中国の歴史教科書が述べている中央政府の姿は、地方にまで拡大させて考えても良いだろう。「忠臣や功臣」は「迫害」され、「佞臣」が「重用」される。「媚びを売ることがうまく、へつらうことに長けた小人」たちが地位や権力を手に入れ、そしてそうした「小人」たちが己の地位や権力を利用して「賄賂」を得たりする。酒や女に溺れ、「奢侈に溺れ、政治を怠る」ような者たちが、政治の世界で幅を利かせている……。江南尉となった李徴の目に「俗悪な大官」と映ったのは、世俗的な欲望の追求に汲々としているエリート官僚たちの姿だったのではないか。

そうした上官たちのありさまを、下品で、卑しく、醜いと感じる李徴は、ある意味で潔癖な倫理観・道徳観を持った人間だと捉えることもできるのだが、これを別な観点から考察してみよう。「下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そう」と考え、「故山、虢略に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけ」る李徴であったが、「文名は容易に揚がらず」、「数年の後」、「節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることにな」る。その一年後、「公用で旅に出」た李徴は「汝水のほとりに宿った時、ついに発狂し」、失踪してしまう。この時、李徴は虎と化していたのだった。そして、その翌年、李徴の「最も親しい友」である袁傪が、「異類の身」となった李徴の前に現れるのだが、李徴は袁傪に向けて、こんなふうに己の苦悩を語る。

> ……しかし、その時、目の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見たとたんに、自分の中の人間はたちまち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血にまみれ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けてきたか、それはとうてい語るに忍びない。ただ、一日のうちに必ず数時間は、人間の心が還ってくる。そういう時には、かつての日と同じく、人語も操れれば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句をそらんずることもできる。その人間の心で、虎としての己の残虐な行いのあとを見、己の運命を振り返る時が、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい。……

身も蓋もない言い方をすれば、虎は肉食動物なのだから、獲物を捕らえ、その肉を食べるのは当然のことである。しかし、李徴は己の行為について、「自分の中の人間」が消えたところで行なわれたものであるにもかかわらず、それを自分がした「残虐な行い」だと考え、「情けなく、恐ろしく、憤ろし」く感じなければならない。それは虎と化した李徴の中に、「人間の心」が残っているからである。そして、「人間の心が還ってくる」時には、「かつての日と同じく、人語も操れれば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句をそらんずることもできる」と李徴は言う。李徴において、自分が人間であることは、言葉を操ること、思考する

こと、そして経書（儒教の経典）に書かれた教義と深く結びついているのである。例えば『論語』をひもとくなら、「郷党第十」は孔子の食生活について次のように紹介している。

孔子の食生活。飯はなるべくよく精白したもの、なまものはなるべく薄く切ったものを食べた。飯が少しでもすえていたり、魚や肉が少しでもいたんでいれば口にしなかった。また、色の悪いもの、悪臭を放つもの、よく火の通っていないもの、季節はずれのもの、切り方がまちがっているもの、ソースが料理に合っていないものは食べなかった。肉はどんなに多くとも飯より多くはとらなかった。酒のほうは別に定量はなかったが、乱れるほどは飲まなかった。酒も乾肉も市販のものは口にしなかった。また、添えてある薬味のしょうがは肉といっしょに食べた。総じて食事の量は多くなかった。(15)

このような孔子の食に対するストイックなこだわり・スタイルを、一つの規範として内面化しているからこそ、鮮血にまみれ、血生ぐさい臭いを放つ生肉を自分が貪り喰っているという事実が李徴を苦しめるのではないか。同じように、「俗悪な大官」たちに対する眼差しを作り出しているものも、儒教的な道徳観・倫理観であっただろう。「君子はまっ先に義を考える。小人はまっ先に利を考える」（里仁第四）、「わるいことをして金や地位を手に入れ、派手な暮らしをするのは、わたしからみれば空に浮かぶ雲みたいなものである」（述而第七）といった孔子の言葉(16)は、そのまま天宝の時代に権力者に取り入って地位や権力を手にした佞臣・奸臣たちに対する批判・揶揄ともなり得る。そして、こうした儒教的な倫理観・道徳観を李徴が自分の中に持っているのは、それが科挙に合格するために必要な知識・教養だったからである。

唐代の科挙の中でも最難関のコースであった進士科で求められたものは、士君子としての人格・教養であるが、それは儒教の経典に精通していることであり、詩文を作る才能を有していることであった。幼い頃から儒教の経典をひたすら覚えこむことを続け、それらの経典に記された思想や道徳を自身の価値基準・行動規範として内面化し、絶対化した李徴がエリート官僚としての人生をスタートさせた時、政治の世界で重用されていたのは、士君子と呼ぶべき「賢明で有能な人」たちではなく、「媚びを売ることがうまく、へつらうことに長けた小人の群」であったのは、皮肉な結果だと言うべきだろうか。それはともかく、科挙に合格するために身につけた知識・教養を、李徴は虎になった後にも手放すことなく、大切にしているからこそ、李徴の内において「人間の心」と「経書の章句」とが結びついているのである。だとすれば、李徴は傲慢で不遜で協調性に欠けた人間ではあるかもしれないが、彼は学問に優れ、経書を通して学んだ儒教的な倫理や道徳を重んずる人間であり、自らは士君子でありたいと望んでいた高潔な人間だと言うこともできるのではないか。

しかし、第１章で述べたように、高等学校の国語教材としての『山月記』（国語の授業的な読み方）においては、李徴は人間性に問題があったから虎になったのだ、という理解が「正しい」ものとなる。ところが、歴史的なコンテクストに目を向けるなら、李徴が「若くして名を虎榜に連ね」た「天宝の末年」には、楊国忠と安禄山の権力争いから安史の乱が勃発し、玄宗皇帝は愛する楊貴妃を死に追いやり、乱の首謀者であった安禄山と史思明は、自分の子どもによって殺されてしまうのである。小森陽一が言うように、「いったい、兎を殺して食べて虎になった李徴と、権力闘争で殺し合う人間たちの、どちらが「善」でどちらが「悪」なのか、といった、単純な二項対立を無効にする懐疑が、『山月記』をめぐる歴史性からは浮かびあがってくる」[17]。

権力者に媚び、へつらうことで地位を得、世俗的な欲望に溺れている高官たちを「俗悪な大官」と見下し、軽蔑する李徴だからこそ、彼は上官に媚び、へつらうことを潔しとしなかったのである（むろん、そこには李徴の傲慢な性格も関わっている）。また、虎と化した李徴は、兎や、その他の獣や、そして人間を喰い殺してきたのだろうが、「虎としての己の残虐な行い」について、「今までにどんな所行をし続けてきたか、それはとうてい語るに忍びない」と歎ずる李徴であれば、彼は自分が権力を得るために政敵を殺したり、あるいは自分の肉親を殺したりすることなどできはしないだろう。李徴は「性、狷介」で、「自ら恃むところすこぶる厚く」、「同輩」のことを「鈍物として歯牙にもかけない」、不遜で傲慢な男であるかもしれないが、権力欲が強く、卑劣で、冷酷非情な人間ではない。こうした李徴像は、国語の授業的な読み方を相対化する問いにつながるだろう――「なぜ李徴が虎にならなければならなかったのか？　李徴の他に、獣となるに相応しい人間たちがいたはずなのに」。

第３章　李徴の詩にはなぜ「欠けるところ」があるのか？

「江南尉」などという「賤吏」に甘んずることを潔しとせず、また「下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈する」ことも良しとせず、「官を退いた」李徴は、「詩家としての名を死後百年に遺そう」と、「故山、虢略に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけ」ることになる。自分が政治家として高く評価されなかったことを不満に思った李徴は、次に詩人としての名声を求めようとしたわけだが、第２章で述べたように、詩文を作る能力とは「士君子の教養の最たるもの」[18] であり、科挙の進士科に合格するために李徴が学び、修得したものであった。李徴が学問において秀でた人間であり、最年少で、そして最も優秀な成績で科挙の合格を勝ち取った男であるならば、彼は詩文に関しても人並み優れた才能を持っていたことだろう。しかし、『山月記』において常に問題とされるのは、李徴が詩人として

の非凡な才能を持っているにもかかわらず、彼の作った詩には「どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがある」という点である。

他でもない。自分は元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業いまだ成らざるに、この運命に立ち至った。かつて作るところの詩数百編、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在ももはやわからなくなっていよう。ところで、そのうち、今もなお記誦せるものが数十ある。これを我がために伝録していただきたいのだ。なにも、これによって一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死にきれないのだ。

袁傪は部下に命じ、筆を執って叢中の声にしたがって書き取らせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短およそ三十編、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁傪は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか、と。

李徴の詩の「欠けるところ」について、「作品には書いてないのだから、わからない」と述べたのは関良一[(19)]であるが、物語の中に李徴が人間だった時に作った詩は一篇も、いやその一節さえ引用されていないし、袁傪が感じた「どこか（非常に微妙な点において）欠けるところ」が何であるのか、その具体的な説明は何もない。しかし、李徴の詩について考察する上で手がかりとなる情報は、いくつかある。叢の中に身を隠した李徴が朗誦した「長短およそ三十編」の詩は、「格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである」ということ。そして、それらの詩は、詩文を作成する能力を持っているはずの袁傪を「感嘆」させるだけのものであったこと。しかし、袁傪は「作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない」と確信しながらも、「漠然」とであるが、「このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか」と感じたこと。だが、それだけではない。

それらの詩は、「官を退いた後」に「故山、虢略に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった」李徴が、「詩家としての名を死後百年に遺そう」との思いで作り上げたものであり、「産を破り心を狂わせてまで」「生涯それに執着したところのもの」でもあった。そして、詩人として「第一流」の「素質」を持った李徴が作った「数百篇」のうち、「今もなお記誦せる」「数十」の作品――絶望・後悔・恐怖・苦悩・憤怒に打ち震え、身悶えする

李徴が口ずさむ詩は、虎と化した李徴の心にかなうものであったはずである。しかし、上にも述べたように、李徴が人間だった時に作った詩は一篇も引用されていないのだから、その出来栄えについて具体的に検討することはできない。したがって、ここでは李徴の詩について考えるために、盛唐期の詩がどのようなものであったのか、特に「詠物詩」と呼ばれるものに焦点を当てて概観してみることにしよう。

李徴の生きた時代において、詩人とは知識人であり、知識人とは貴族やエリート官僚などの一部の人間たちであった。こうした文化的・政治的な状況は、現代の日本とは大きく異なっている。中島敏夫は唐代の詩人について、こう述べる――「詩人というものは、古典中国の世界ではいうまでもないことだが、特別の職業ではない。知識人のすべてが、一応、詩を作ることになっていたのであるから、知識人即詩人ともいえるわけである。しいて言えば、それら知識人の中の特別、詩才に秀で、傑れた詩を作った人びとを詩人と呼びならわすこともできるということである。かつ、知識人は、この時代においては原則的に、貴族・官僚以外にはありえず、またそれら貴族・官僚のすべてが、一応、知識人の範疇に入った」[20]。そして、彼ら知識人たちは、官僚としての生活の中で詩を作ったのである。

「皇帝、王侯、貴族は四時の集いで詩を作り、かつ詩を作らせた」[21] のであるが、玄宗皇帝の時代においても、宮中や上流階級のサロンでは、周囲にある事物や風景など、その場で与えられた題目を詠った「詠物詩」が多く作られている。「詠物詩が詩の一つのジャンルとしてその形式を整えたのは、南齊の永明年間のこととされる」[22] が、六朝時代の詠物詩について、伊﨑孝幸はこう概括する――「何を詠うかというよりも、いかに詠うかということに重きを置いた技巧的なもの」であり、「当時の貴族社会における社交を背景としていることもあって、遊戯的な性格を強く持つものでもある」が、「作者の人生経験に裏打ちされた個人的な観察や心情は、全くといっていいほど詠われていない」。それは、「サロンにおける詠物詩が、個人の情感、思想を盛る器として考えられていなかったということであろう」[23] と。

こうした詠物詩の性格・傾向は唐代にも引き継がれるのだが、「盛唐に至って従来とはまるで異なる作品が書かれるようにな」る。「その象徴ともいえるのが、杜甫の詠物詩」であった。杜甫の作った詠物詩には「作者の対象物に対する個人的な情感が明瞭に詠み込まれて」おり、それが「作品の最も重要な部分を形成している」と伊﨑は評価する。そして、「杜甫の開いた新しい詠物詩の流れ」は、韓愈（768 年～ 824 年）や白居易（772 年～ 846 年）といった中唐期の詩人たちに引き継がれてゆく[24]、と伊﨑は言うが、しかし杜甫（712 年～ 770 年）は、そして杜甫より 10 年ほど早く生まれた李白も、生前に詩人として高い評価を得ていたわけではなかった。盛唐を代表する詩人――詩聖・杜甫と詩仙・李白のことを、後の時代に韓愈が「李杜文章在り、光燄万丈長し」と詠ったのは、「二人の文学に対する評価が不当に低いのに抗議しようとした意味があ」ったのである[25]。

杜甫の詠物詩について、それらを杜甫が作ったのは「従来の詠物詩が作られてきた場とは異なる場、すなわち宮廷の文学サロンとは異なる場においてであった」[26] と伊崎は指摘する。詩人とは科挙に合格したエリート官僚たちであり、詩とは官僚としての生活の中で作られるものであった時代において、科挙に合格できなかった杜甫は、宮廷を中心とした世界として存在する詩壇[27] から外れたところにいた人間であった。科挙を受験したことさえない李白も、一時、翰林供奉という職に就いたが、これは官僚組織の中に含まれるものではないため、彼は生涯、正規の官位を得たことがなかったのである。詩壇の中心にいるエリート官僚たちにとって、杜甫も李白も詩人という範疇から外れた存在だったと言えるだろう。こうした杜甫・李白の政治的なポジションは、彼らの詩人としての評価が生前には低かったことと無関係ではない。

では、李徴の場合は、どうなのか。「たんねんに貴族・高官の門をたたき、ごきげんとりの詩をささげてまわれば、いつかはどこかで認めてくれて、出入りをさし許されるであろう。そうなれば、経済的な援助も得られるし、科挙を受けるにしても、裏から運動してもらえる見こみがある」――これが杜甫や李白の時代の「常識的なコース」だと、前野直彬は言う[28]。李徴の場合、科挙に合格し、手に入れたエリート官僚としての地位を自ら抛ってしまったのであり、科挙の受験のために「裏から運動してもら」う必要はない。しかし、詩人としての名を得るためには、「貴族や高官の門をたたき」、政治的・経済的な力を持った彼らに媚び、おもねるような詩を作ることも必要だっただろうし、彼らから「経済的な援助」が得られたなら、「妻子の衣食のために」「節を屈」する必要もなかっただろう。けれども、「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚」い李徴には、「ごきげんとりの詩をささげてまわ」ることなどできなかったに違いない。

また、李徴は「人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった」。詩人としての名を得たいならば、知識人＝詩人たちと交流し、詩を贈る／贈られる、という関係の中に身を置くべきだったはずだが、李徴は「求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった」のである[29]。人との交わりを絶ち、「従来の詠物詩が作られてきた場とは異なる場、すなわち宮廷の文学サロンとは異なる場」（伊崎）において、李徴は詩を作り続けた。それは、権力者に媚び、おもねるような詩ではない。また、文学サロンにおける「遊戯的な性格を強く持つもの」（伊崎）でもなければ、唐代の詩人の詩集に大きな比重を占める「……に宴す」「……に陪す」「……に遊ぶ」と題する詩や、「……に贈る」「……に献ず」「……に寄す」「……と別る」「……を送る」「……に答う」と題する詩[30] とも違ったものであっただろう。

そして、叢の中に身を隠した李徴が朗誦した「長短およそ三十編」の詩は、虎と化した「今もなお」忘れることなく、その心に留めていて、「人間の心が還って」きた時に口ずさむ詩である。人間としてのあらゆる可能性を暴力的に剥奪され、間もなくすれば李徴という人間

の意識が完全に消滅することを自覚し、それを「この上なく恐ろしく」、「哀しく、切なく思っている」李徴。そして、自分の運命を呪い、嘆き、憤る李徴は、自分の「気持ち」が「誰にもわからない」のだと痛感してもいる。「人間の心が還ってくる」時、李徴は恐怖や苦悩や悲哀や憤怒や孤独に身悶えしなければならないのだが、そんな李徴が口ずさむ詩とは、李徴の思いと響き合うもの、あるいは李徴の気持ちを宥めてくれるものであったに違いない。それらの詩は、宮廷の文学サロンで作られる詩とは異なる性格のものであり、そこには李徴という人間の情感が託されていたはずだと想像することも許されるだろう。

では、なぜ李徴の詩には「欠けるところ」があるのか。高等学校の国語教材としての『山月記』（国語の授業的な読み方）においては、「欠けるところ」がある理由を、李徴自身の中に見出そうとする。李徴が虎になった原因や理由に関する説明と同じで、李徴という人間の性格や人柄が問題となる。例えば、李徴は自分が「飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男」であった、と「自嘲的な調子」で述懐する。この自己批判めいた言葉などを踏まえ、妻子に対する愛情の欠如、あるいは人間性の欠如が、李徴の詩の「欠けるところ」につながるのだ、という解釈がなされることになる。あるいは、李徴は「詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった」。この部分などを踏まえると、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」ゆえに、「切磋琢磨」し、自分の才能を「刻苦して磨」くことをしなかったため、李徴の詩は「第一流の作品」となれなかったのだ、という解釈になる。

しかし、松村良も述べているように、「第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか」とは、「袁傪の評価」である（松村は「声」と「文字」、「聞くこと」と「読むこと」という点から「欠けるところ」に関する問題を論じているのだが、ここではそのことに言及しない）[31]。エリート官僚として政権の中枢にいる袁傪の身近にあったのは、文学サロンにおいて、あるいは宴の席において詠まれる宮廷詩であり、そうした華やかな宮廷詩の世界は「嘘いつわりのない真情を吐露できる場」ではなかったし、「沈鬱な内省にふさわしい場」でもなかった[32]。袁傪が感じた「欠けるところ」とは、宮廷詩の持つ華やかさや、いかに詠うかという技巧的な要素が欠けるところに起因するものであったかもしれない。あるいは、李徴が己と向き合い、己の真情・情感を詠み込んだ詩は、宮廷詩にはない要素を含むがゆえに、それが袁傪にある種の違和感をもたらしたのだと考えることもできるだろう。

第４章　李徴にとって袁傪とはどのような存在なのか？

袁傪は「李徴と同年に進士の第に登」った男であり、商於の林中で再会した袁傪と李徴は「青年時代に親しかった者どうしの、あの隔てのない語調で」言葉を交わす。「青年時代に親しかった者どうし」という表現から明らかなように、李徴が青年と呼ばれる年齢であった時、袁傪もまた青年と呼ばれる年齢であったのであり、この二人の年齢は大きく離れてはいない。つまり、袁傪もまた、「若くして名を虎榜に連ね」た男なのである。虎と化した李徴の前に現れた袁傪の役職は「監察御史」であるが、将来を嘱望されるエリート官僚がこの監察御史という地位に就くことが多かった。第１章で述べたように、「宰相に至るまでの典型的な出世コース」は「秘書省校書郎→畿県（首都周辺の県）の尉→監察御史→拾遺→尚書省の員外郎→中書舎人→中書侍郎」というものであり、袁傪は順調に出世コースをたどっている人間だと考えていいだろう。

再会した袁傪と李徴の対話は、「都のうわさ、旧友の消息、袁傪が現在の地位、それに対する李徴の祝辞」といった、当たり障りのない話題からスタートするが、監察御史という「袁傪が現在の地位」を聞いて、李徴が「祝辞」を述べるのは、かつてエリート官僚だった李徴には、その地位の持つ意味が分かるからである。「温和」な性格で、「友人の少なかった李徴にとっては、最も親しい友であった」袁傪は、『山月記』という物語において重要な役割を担っている。商於の林中で、「あわや袁傪に躍りかかるかと見えたが、たちまち身を翻して、元の叢に隠れた」「一匹の猛虎」。その人喰い虎が人間の言葉で「あぶないところだった」とつぶやくのを聞き、それがかつての友・李徴の声であると思い当たった袁傪は、とっさに叫ぶ――「その声は、我が友、李徴子ではないか？」と。

> 叢の中からは、しばらく返事がなかった。しのび泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあって、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である。」と。
>
> 袁傪は恐怖を忘れ、馬から降りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起こさせるに決まっているからだ。しかし、今、図らずも故人に会うことを得て、愧赧の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形をいとわず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

虎と化してからの一年間、李徴は人間を襲い、その人間を喰い殺したことは幾度もあった

だろうが、人と会話し、その人に向けて自分の苦悩や悲哀を語ることはなかったはずである。「胸を灼く悲しみを誰かに訴えたい」と思っても、そんな相手はいないし、「誰かにこの苦しみが分かってもらえないか」と「月に向かってほえ」ても、「獣ども」は李徴の「声」を聞き、「ただ、懼れ、ひれ伏すばかり」である。そんな李徴の前に、「今」、かつての友・袁傪が現れ、そして袁傪は人喰い虎の前から逃げ出そうともせず、「その声は、我が友、李徴子ではないか？」と語りかけてきてくれた。これは李徴にとって千載一遇の機会であり、李徴に与えられた最後の可能性だと言っていい。例えば商於あたりに暮らす庶民であれば、たとえ人喰い虎の話を聞いてくれたとしても、李徴の詩を伝録することなどできないだろうし、ましてや虢略にいる李徴の妻子に救いの手を差し伸べてくれることなど期待すべくもない。

「我が友、李徴子ではないか？」と問いかけられた時、李徴の中に逡巡があったことは間違いないだろうが、「叢の中からは、しばらく返事がなかった」という、その「しばらく」の間に、袁傪と再会できたことが自分にとってどのような意味を持つのかを、李徴は考えていたはずである。この機を逃してはならない。そう判断したからこそ、李徴は「いかにも自分は隴西の李徴である」と返事をするのであり、「どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形をいとわず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか」と、尊大で、峻峭な李徴の性情には似合わない、へりくだった言い方で袁傪に懇願するのである。袁傪という聴き手の存在が、李徴の告白・吐露を可能とさせるのだと言ってもいい。李徴は語りたいのである、虎と化してからの一年間、誰にも語ることのできなかった自分の苦悩や悲哀を。そして、自分が作った詩を、故郷にいる妻子のことを、李徴は袁傪に託したいのである。

李徴の告白を引き出すことになる袁傪は、「勅命」すなわち皇帝の命を帯び、嶺南に向かう途中であり、袁傪の背後には皇帝の威光・中央政府の権力が存在する。袁傪は「温和」な性格の人間だと語られているが、「今はまだ朝が早いから、いま少し待たれたがよろしいでしょう」という「駅吏の言葉を退けて、出発」するのは、彼が大勢の、おそらく武器をも携えた「供回り」を率いているからであり、人喰い虎が出ても、部下がそれを討ち取ってくれるという自信があるからに他ならない。李徴は「即席の詩」の中で「君已乗軺気勢豪」と詠うが、袁傪の乗る立派な馬車は、彼の持つ権力を目に見える形で示すものでもある。「軺」に乗り、大勢の供を引き連れ、嶺南に向かう袁傪に関して、藪沼正美はウラジミール・プロップによるロシアの魔法昔話の構造分析を踏まえながら、「袁傪は単なる聞き手ではなく、〔移動〕とともに〔変化〕という〔機能〕をも担った存在である」と意味づける(33)。藪沼が着目するのは、『山月記』の中の次の一文である。

後で考えれば不思議だったが、その時、袁傪は、この超自然の怪異を、実に素直に受け

入れて、少しも怪しもうとしなかった。……

商於の林中で虎と化した李徴と再会し、李徴との対話を始めた時、袁傪は「超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった」が、「後」になって、その出来事を振り返った時、袁傪は自身の体験したものを現実にはあり得ないことと考え、「素直に受け入れ」ることができなくなったのだ、と上の一文は語っている。蓼沼はここに、袁傪の「変化」を読み取る。「後で考えれば」の「後」とはいつなのか、具体的に書かれていないが、商於での体験を袁傪が「相対化」できるようになるのは、「嶺南での使いを果たし、再び「陳郡」に帰ってから」のことであるはずだ、と蓼沼は言う(34)。嶺南での監察業務を終えた袁傪が戻っていく場所は、都・長安であるはずだが、長安→商於→嶺南→長安という「移動」を通して、袁傪という人間に「変化」が起きることについて、蓼沼は次のように述べる。

> ……この〔引用者註：商於の林中での〕体験が相対化出来る、つまり冷静に考えてみることが出来るのは、決してそれをともにした「部下」といる間ではありません。事実として信じてくれる者が誰もいない状況に出会って、初めて「この超自然の怪異」を、「不思議だった」と認識することが出来るようになるわけです。その意味で袁傪は、「実に素直に受容れて、少しも怪しもうとしな」いでいるうちはいいのですが、いったん「不思議だった」と認識してしまった以上、今度はこの二つの自分の間で、激しい葛藤を続けていかなければなりません。だとすると袁傪は、いや袁傪でなくても、そういう葛藤の中で性格も人生観も、時には精神さえも、大きく「変化」をしてしまうことになるのではないでしょうか。……(35)

長安や嶺南が袁傪にとっての現実世界（日常）であるとすれば、商於の林中は異界（非日常）と位置づけることもできる。あるいは、夜と朝との狭間で、「異類の身」となった李徴と人間である袁傪とが出会い、そして分かれることになる商於の林中は、非日常と日常との境界だと言ってもいいかもしれない。異界あるいは境界で「超自然の怪異」を体験した袁傪は、日常の世界へと戻った時、虎と化した旧友との邂逅という出来事を「素直に受け入れ」ることができなくなってしまうのである。「超自然の怪異」――とても説明がつかないこと、現実にはありえないことなのだが、しかし袁傪の脳裏には、商於の林中で虎と化した旧友と邂逅したという出来事が確かな記憶として刻まれている。では、その出来事を現実であり事実であると「受け入れ」るのか、それとも幻覚・幻影であったと否定するのか。それが袁傪の抱えこむことになる葛藤の具体的な中味であり、その葛藤にけりをつけるために袁傪が選んだ結論は明らかだろう。

上で述べたように、商於の林中では「実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった」出来事に対する袁傪の考え方は、日常の世界に戻ってから「変化」する。「後で」振り返ると、自分がその出来事を「素直に受け入れ」たことが「不思議」でならない。「今」ではそれが現実にはあり得ない「超自然の怪異」だとしか思えず、その実に「怪し」い出来事を、とても「素直に受け入れ」ることはできないのである。袁傪は虎と化した李徴と邂逅する以前の自分の常識・価値観にもとづいて、自分の体験した出来事をあり得ないことだと否定するわけだが、しかし袁傪の手元には「部下に命じ、筆を執って叢中の声に従って書きとらせた」李徴の詩が存在する。それは、虎と化した旧友との邂逅が現実の出来事であったことを裏付ける物的証拠に他ならない。では、虎と化した李徴との出会いを無かったこととして否定するために、袁傪がなすべきこと。それは、自らの手で李徴の詩を葬り去ることであるだろう。

高等学校の国語教材としての『山月記』（国語の授業的な読み方）においては、袁傪は「温和な」性格の人間であり、李徴の友人・李徴の理解者として、虎になった李徴の告白に耳を傾けるとともに、李徴の詩に「欠けるところがある」ことを感じ取る役割を担っている、といったように位置づけられる。そして、国語の授業では、李徴の友人である袁傪が「欠けるところがある」と感じたのであるから、「欠けるところがある」のは間違いなく事実だ（袁傪は信頼できる証人だ）という前提で、「欠けるところがある」原因や理由を李徴の性格・人間性に求めることになる。第３章で述べたように、李徴は妻子に対する愛情が欠如していたから、彼の作った詩には「欠けるところがある」のであり、李徴の性格や生き方には問題があったから、彼は虎になってしまったのだ、という因果関係を捉えることが、高等学校の国語の授業では「正しい」読みとなるのである。

しかし、語り手は李徴の詩について、「格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかり」だと述べているのであり、李徴の詩には「欠けるところがある」という袁傪の評価を、必ずしも袁傪の主観の恣意性を離れた妥当性を持つものと考える必要はない。また、袁傪は腐敗した政治の世界で順調に出世コースを歩むエリートであって、彼を「温和な」性格の人間であり、李徴の友人・理解者であると捉えるだけでは、不十分である。特に、「後で考えれば不思議だったが、その時、袁傪は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった」という一文に着目するなら、そこから浮かび上がってくるのは、虎と化した李徴との邂逅、それ自体を否定し、李徴から託された詩を葬り去る袁傪の姿であった。これに関連して興味深いのは、『山月記』の典拠となった唐代の伝奇小説『人虎伝』の結末部分である。中島敦が参照したのは『唐代叢書』系統の本文であるといわれているが、ここでは『太平広記』本の『人虎伝』から引用することにしよう。

虎が言う、「わしには昔の文章が数十篇あるが、まだ世に伝わっていない。残しておいた草稿があったが、皆すべて散り散りばらばらになってしまった。君よ、わしのために記録しておいておくれ。他人の家々に置かれるようなことはないとしても、しかし子孫に伝えられることを尊ぶのである」と。（略）傒は南から帰った。かくて頼まれた通りに手紙と香奠をもたせて、徵の息子にとどけさせた。一箇月余りして、徵の息子は虢略から都へ来て、傒の家を訪れ、亡父の柩を求めた。傒はしかたなく、こと細かにその事実を述べた。後、傒は自分の俸給を徵の妻子に等しく分与し、飢え凍えを免れるようにとりはからった。傒は後に兵部侍郎にまでなった。(36)

『人虎伝』の袁傒は李徵の息子に、商於の林中で虎と化した李徵と出会った事実を伝え、妻子が飢え凍えることのないように計らってやってほしい、という李徵の願いを叶えてやっている。そして、李徵が虎になったことや、虎になった李徵が語った話など、「こと細かにその事実を述べた」袁傒は、おそらく李徵の息子に李徵が作った文章（袁傒が下男に書き取らせたもの）を手渡したことだろう。しかし、『山月記』の袁傒は、李徵から託された詩を葬り去ったに違いないと上で述べたが、これは「語り」の問題からも考えることができる。『山月記』の語り手が李徵と袁傒の物語を語っている「今」が、一体いつなのかは特定できないが、「後で考えれば不思議だったが……」という表現から明らかなように、それは袁傒と李徵が今生の別れを交わす結末部分よりも後のことになる。そして、語り手が李徵と袁傒の物語を語っている時点において、李徵が袁傒に託した詩は「世に行われて」いないはずなのである。では、妻子が飢え凍えることのないように計らってやってほしい、という李徵の願いを、『山月記』の袁傒は叶えてやったのだろうか。

いささか長すぎる「あとがき」
――授業では『山月記』をどのように読んだのか？

「はじめに」で述べたように、2017年度の第2学年「現代文Ｂ」では、中島敦『山月記』を教材として授業を行なったが、その授業は国語の教科書に採録されている作品、つまりは様々な教科書の目次に並んでいる作品について考えることから始まった。教科書は学習指導要領・教科用図書検定基準などにもとづいて編集・作成されるが、例えば「数学Ⅰ」や「世界史Ｂ」の場合、「学習指導要領」の「内容」という項目で「数学Ⅰ」「世界史Ｂ」で何を学ぶのかが具体的に示されていて、それはほぼそのまま「数学Ⅰ」「世界史Ｂ」の教科書の目次とリンクすることになる。ところが、「現代文Ｂ」の場合は、そうではない。では、「現代

文Ｂ」の「内容」（学習指導要領）を見てみよう。

⑴ 次の事項について指導する。
ア　文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確にとらえ、その論理性を評価すること。
イ　文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わうこと。
ウ　文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。
エ　目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること。
オ　語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てること。
⑵ ⑴ に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
ア　文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。
イ　論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。
ウ　伝えたい情報を表現するためのメディアとしての文字、音声、画像などの特色をとらえて、目的に応じた表現の仕方を考えたり創作的な活動を行ったりすること。
エ　文章を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果をまとめて発表したり報告書や論文集などに編集したりすること。(37)

「現代文Ｂ」の「内容」について言えば、「数学Ⅰ」や「世界史Ｂ」と比べて、何を学ぶのかが抽象的なレベルでしか書かれていない。「文学的な文章」と「論理的な文章」を読むことにはなっているので、小説・詩歌そして評論が教科書に採録されるわけだが、どんな作家のどんな作品を読むべきかは定められていないのである。その結果、「現代文Ｂ」の教科書の目次を比較してみると、そこに並んでいる作品は教科書ごとに大きく違っている。授業では実際に複数の教科書の目次を並べて、その冒頭教材を比べてみた。第一学習社『現代文Ｂ』は見田宗介「「自明性の罠」からの解放」、第一学習社『標準現代文Ｂ』は大脇三千代「わたしはあなただったかもしれない」、東京書籍『精選現代文Ｂ』は小林康夫「世界をつくり替えるために」、東京書籍『新編現代文Ｂ』は石川直樹「海流　ミクロネシア」、三省堂『現代文Ｂ』は赤坂憲雄「木を伐る人／植える人」、三省堂『精選現代文Ｂ』は茂木健一郎「最初のペンギン」、三省堂『明解現代文Ｂ』は角田光代「待つということ」、筑摩書房『精選現代文Ｂ』は原研哉「情報の彫刻」、筑摩書房『現代文Ｂ』は長田弘「歩く人」、etc……。

2017年度の場合、「現代文」の教科書は「現代文Ａ」が5種類（5社）、「現代文Ｂ」が25種類（9社）、「現代文Ａ」と「現代文Ｂ」を合わせると全部で30種類の教科書があり、そのうち29種類の教科書に『山月記』が採録されている。唯一『山月記』を採録していないのは、教育出版『現代文Ａ　青春文学名作選』であるが、ここには中島敦『悟浄歎異』が採録されており、高校生はどの「現代文」の教科書で学習しようと、必ず中島敦という作家の名前と出会うことになる。「学習指導要領」が中島敦を読むように定めているわけではないのに、各社各種の教科書に中島敦が採録されているのである。小説で言えば芥川龍之介『羅生門』、中島敦『山月記』、夏目漱石『こころ』など、各社各種の教科書に共通する作品（あるいは以前から複数の教科書に採録されている作品）を業界では「定番教材」と呼んだりすることを確認した上で、なぜ『山月記』は「定番教材」なのか、という問いを生徒たちと共有し、授業は次のステップに進むことになった。

「定番教材」としての『山月記』について考えるために、有効な手がかりとなるのは、それぞれの教科書が「学習の手引き」などの名で設定している課題である。授業では各社の教科書の「学習の手引き」を比較し、そこに共通する設問が複数あることを確認した上で、生徒自身にそれらの設問に対する解答を作成させる課題を課した。それは複数の教科書の「学習の手引き」からいくつかの設問をピックアップしたもので、具体的には「(1) 虎になる前の李徴はどのような人物だったか、その性格・生き方を中心にまとめてみよう」「(2) 李徴が、自分が虎になった理由について告白する内容を、次の表現に留意して整理してみよう。①理由もわからずに……生き物のさだめだ。②ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。③飢え凍えようとする妻子の……こんな獣に身を堕とすのだ」「(3) 袁傪は李徴にとってどのような存在か、袁傪の人柄や現在の境遇などに留意してまとめてみよう」「(4) 袁傪は李徴の詩についてどのように考えているか、まとめてみよう」という4つの設問が含まれていた。

授業では上の4つの設問に対する国語の授業的な「答え」を確認するとともに、教材としての『山月記』がどのように読まれているのかを考察したのであるが、それは本稿で述べた内容とほぼ一致している。小森陽一が指摘するように、「学習の手引き」の設問は、李徴の人間性や生き方には問題があったから、李徴は虎になってしまったのであり、同じ理由で、李徴の作った詩も第一流の作品となれなかったのだ、という因果関係を読み取るように生徒を誘導するものである[38]。生徒に課した課題の中には含めなかったが、第一学習社『現代文Ｂ』の「言葉と表現」（学習の手引き）には「「山月記」を読んだ感想を、八百字程度で書いてみよう」という課題が設定されている。授業では、いわゆる「教科書ガイド」に載っている「解答例」をプリントとして配布し、どのような感想文を書くことが期待されているのかを確かめるとともに、国語の授業では『山月記』をどのように読みたいのかを考察した。「教

科書ガイド」の「解答例」から引用しよう。

人は誰でも独りで生きていくことができない――。「博学才穎」な李徴がたどったあまりにも哀しい顛末は、ひとえにこのことを示唆しているように感じられる。虎に身を落とした李徴が、林の中で遭遇したかつての友・袁傪に、「人間であったとき、おれは努めて人との交わりを避けた。」と自らを省みていることからも、その因果関係は明白なものとなっている。しかもそれは自分の「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」とのせいだと述べている。それは多かれ少なかれ誰の心の中にもあるもので、だからこの二つの言葉は読み手の内面をえぐるように突き刺してくる。――身に覚えがあるだろう？　独りよがりな思いに浸り、周りが自分を理解してくれないのだと責任を転嫁し、そのくせ自分では何ひとつ行動を起こそうとはせず、殻に閉じこもり心を閉ざしてしまっていたことが……。まるでそんな詰問をされているかのようにさえ受け取れる。李徴の時代と異なり、現代ではインターネットの普及によって誰もが表現者たり得る。才能の有無にかかわらず、表現の場があるというのは非常に魅力的であり、なおかつ有用である。だが、人と人とのつながりを持たずに表現者になったところでそれが何になるというのか。それは李徴の時代も現代も同じことで、なんら差異はない。李徴の詩を書き取った袁傪が、作品に対して感じた微妙な欠落点とは、人との交わりの中で洗練されていくある種のセンスとかウィットなどのようなものだったのではないだろうか。……(39)

この「解答例」では、李徴の生き方や、李徴の心の中にあった「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」に言及し、李徴のような性情は「多かれ少なかれ誰の心の中にもあるもの」だと述べている。また、表現することをめぐる問題について、「李徴の時代も現代も同じことで、何ら差異はない」と言う。こうした部分から読み取れるように、「感想文を書く」という課題が求めているものは、李徴と自分（学習者自身）とを重ね合わせ、李徴という男の悲劇を通して自分自身の生き方を見つめ直すことなのである。ここには、「国語教材」としての『山月記』がどのように読まれているのか（読まれてきたのか）が、よく表れている。教室（国語の授業）では李徴という人間の生き方が問題とされるのであり、生徒は李徴の物語を通して自分自身の生き方を考えることが求められる。「君たち高校生の中にも、李徴がいるはずだ」「李徴を自分自身と重ね合わせ、李徴の悲劇を通して、自分の今までの生き方を振り返り、これからの自分の生き方について考えてごらん」――これが、「感想文を書いてみよう」という課題の裏側にあるメッセージなのである。

石原千秋は「「定番教材」の「定番教材」たるゆえん」について、こう指摘する――「『羅生門』も『山月記』も『こころ』も『舞姫』も、「エゴイズムはいけません」といういかに

も道徳的なメッセージを教えることができる教材なのだ。戦後の学校空間で行なわれる国語教育は、詰まるところ道徳教育なのである」[40] と。「国語教材」としての『山月記』は、李徴の物語を現代を生きる高校生にも通じる物語として読むことを求める。授業では石原千秋の文章もプリントとして配布し、李徴の生き方・李徴の悲劇を通して、高校生が自分の生き方を見つめなおすための作品という点で、「定番教材」の『山月記』は「道徳教材」として読まれてきたことを確認した上で、授業は次のステップに進むことになった。それは、李徴と自分（学習者自身）を重ね合わせて読むのではなく、主人公＝李徴と作者＝中島敦とを重ね合わせて読む読み方である。

『山月記』を作者＝中島敦の作品として読む、という授業は、まず野村萬斎の構成・演出による舞台劇『山月記』を収録したDVDを鑑賞することからスタートした。能や狂言の要素も取り入れた舞台劇『山月記』の初演は2005年、野村萬斎が世田谷パブリックシアターの芸術監督に就任後、最初に演出した作品で、林和利が言うように「作品のテーマは、とりもなおさず敦自身の問題でもあることが観客にイメージされる」ような「演出の工夫」がなされている[41]。「現代文」の教科書などでもおなじみの、ロイド眼鏡をかけ、髪を一九分けにし、背広を着た作者＝中島敦の肖像が、まず舞台上に写し出され、それに続いて舞台に流れるナレーションによって、作者＝中島敦の略歴が紹介される。興味深いのは、「執筆を続けるが、評価は上がらず」「妻子を残してパラオに旅立つ」「著作に恥る」「死期を悟った彼」など、『山月記』の主人公＝李徴と作者＝中島敦とが重なり合うような言葉がそのナレーションの中にちりばめられていることだろう。

作家・中島敦は、明治42年、東京四谷に生まれた。祖父伝来の漢学・儒教の家に育つが、家庭に恵まれず、大正3年、5歳の時に両親が離婚、産みの母親を知らずに育つ。生まれつき病弱な敦は、18歳の時、肋膜炎に罹り、以降、喘息の発作に苦しみ続ける。この頃から、彼の本格的な執筆活動が始まる。

昭和8年、敦24歳、東京帝国大学文学部国文科卒業。結婚し、2児をもうける。生命を危ぶまれるほどの喘息の発作にみまわれながらも、執筆を続けるが、評価は上がらず、昭和16年、敦32歳の時、転地療養も兼ね、南洋庁国語編修書記として、妻子を残してパラオに旅立つ。この年、太平洋戦争が勃発した。翌昭和17年、日本に帰国、著作に恥るが、喘息の発作は酷くなるばかり。死期を悟った彼の内部には、常に自己懐疑、死への恐怖があふれ、地球と人類の滅亡の悪夢が湧いては去り、湧いては去って行った。

12月4日、世田谷区内の病院において、喘息のため死去。享年33。

――自己とは何か。現実とは何か。[42]

白装束を着た李徴（野村万作）が死者のように横たわる舞台には、ロイド眼鏡をかけ、髪を一九分けにした、背広姿の「敦」（野村萬斎）が現れ、こう言う――「人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短い」。「敦」が口にした、このアフォリズムのような言葉は、『山月記』において李徴が語る言葉でもある。後に舞台の上で李徴がこの言葉を口にする時、観客は李徴の言葉を「敦」自身の思いを吐露したものとして受け止めることになるだろう。ステージに目をもどせば、萬斎が演じる「敦」は舞台の上を歩みながらモノローグを続ける――「私は自分の短い影を見ながら、歩いていた。かなり長いこと、歩いた。ふと、妙なことが起こった。私が私に聞いたのだ」と。この時、死の床から身を起こした李徴が、「敦」の言葉を引き取って言う――「俺は誰だ」と。それに対して、「名前なんか符号に過ぎない」と「敦」が強く言い放つと、舞台の上には新たに３人の「敦たち」が現れ、彼らは声を和して問いかける――「いったい、お前は何者だ」と。この時、立ち上がった李徴（萬斎）が、自らの名を乗るかのように、「隴西の李徴は……」と告げると、「敦たち」がその後を引き取って、「博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね……」と、李徴の経歴を語りはじめるのである。

李徴の周囲で４人の「敦たち」が踊り回り、時には李徴の台詞を唱和したりする舞台劇を観ることで、生徒たちは『山月記』が中島敦の作品であり、この作品には作者＝中島敦の思いや苦悩や問題意識が託されているのだというイメージを抱くことができただろう。授業では、DVD を観た後に演出上の仕掛けなどについて確認した上で、次には勝又浩の論文「『山月記』鑑賞」を生徒と一緒に読むことにした。この論文を選んだのは、李徴は妻子に対する愛情が欠如した男だった、という国語の授業的な読み方とは逆の解釈が提示されているからである。勝又は言う――「「欠ける所」をめぐって、従来の国語教科書的な解説では、「愛」や「人間性」の欠如だと説明されてきたが、事はむしろ逆で、なまじ「人間性」があったが故の彼の悲劇であった」[43] と。そして、勝又は「「貧窮に堪へず、妻子の衣食のために遂に節を屈して」働きに出たような心弱き詩人」李徴の姿を、「作家を志してはいたが、生活がそれを必要とすれば女学校教員としての務めもきちんと果たしてい」た作者＝中島敦の姿と重ねあわせながら、『山月記』を読もうとするのである[44]。

勝又の読み方・勝又の解釈は、それなりに説得力のあるものとして生徒にも受け止められたようであったが、次に授業で行なったのは、「テクスト」という概念を確認し、共有することであった（あわせて「コンテクスト」という言葉の意味も確認した）。「従来、文学を読み解くということは、作品に込められた作者の思想や意図を読み取ることだとされていた。この場合、作品の読解には「唯一の正解」があることになる。／こうした文学観に対して、批評理論と呼ばれる分野では、「文章はいったん書かれれば、作者からは独立し、読者によって多様な読まれ方をされてよい」という思想が突きつけられた。作品という言葉はどうし

ても作者との結びつきを感じさせてしまう。そこで、作品とは異なり、多様な解釈に開かれている文章を「テクスト」と呼ぶ」[45]。

この「テクスト」という概念を共有した上で、『山月記』を作者＝中島敦の物語として読むのではなく、また『山月記』を現代に生きる高校生のための物語として読むのでもない、第3の読み方はできないだろうか、と生徒たちに問いかけることで、『山月記』の授業は最後のステップに入った。『山月記』は今から1250年以上前（具体的には天宝・至徳と呼ばれる時代）の中国を舞台とした物語であり、現代の日本とは社会的・文化的な状況も大きく異なるのだから、『山月記』の背景となっている時代の歴史的・社会的・文化的なコンテクストを参照することで、教科書の『山月記』だけを読んだ時には気付かなかったことが見えてくるのではないか。この問いを共有した上で、さまざまな資料（配布プリント）を使いながら『山月記』を読み直していったのだが、その授業の内容が本稿の第1章から第4章に相当する。もちろん、ここに書いたことが授業の全てではなく、「語り」「視点」という概念を確認し、『山月記』という物語がどのような視点から語られているか、といった分析なども行なった[46]。

盛唐の歴史に関すること、科挙に関すること、唐代の詩人に関すること、儒教に関することなどなど、たくさんのプリントを使いながら授業を行なったのは、なぜそう読めるのか・どうしてそう解釈できるのか、という具体的な根拠を生徒と共有するためである。「文章はいったん書かれれば、作者からは独立し、読者によって多様な読まれ方をされてよい」のだと言っても、正当性や説得性の全くない、誤読・妄想と言うしかないような解釈は、授業の場においては（あるいは学問・研究という場においては）通用しない。他の人も納得できるような客観性を持つ必要がある、ということも授業の中では繰り返し生徒に伝えた。「国語では、ひとつの作品が様々に解釈できることを学びました」[47]という生徒の感想もあり、国語の授業的な読み方、勝又浩の作家論的な読み方、様々な資料を用いた授業での読み方、そのそれぞれに説得力があると感じた生徒がいることは確かだろう。

「小説を読む技術」を教えることの必要性を訴える石原千秋は、こう述べる――「とりあえずできることは、少なくとも二通りには読めるような小説教材を選ぶことである。その上で、二通りに読める技術を教えることができれば、とりあえずは良しとしなければならないだろう」[48]と。さて、2017年度の『山月記』の授業が、「とりあえずは良し」とできるようなものであったかどうかはともかく、作品を歴史・文化的コンテクストの中に置くことで見えてくる読みの可能性、ということは伝えられたのではないかと思っている。『山月記』の授業を受けた生徒の中から、何年後かに「私は『山月記』をこんなふうに読めると思います」と、自分なりの『山月記』論を携えて学校に訪ねて来る者がいたならば、自分にとって、果報、これに過ぎたるはない、ということかと。

【註】

（1）平田茂樹『科挙と官僚制』山川出版社、1997 年、pp.2-3
（2）平田、同書、p.3
（3）村山吉廣『楊貴妃』中央公論社（中公新書）、1997 年、p.9
（4）村山、同書、p.47
（5）平田、前掲書、p.8
（6）高木重俊・石嘉福『名勝　唐詩選（下）』日本放送出版協会、1996 年、pp.10-11
（7）高木・石、同書、p.4
（8）前野直彬『中国名詩鑑賞 3　李白』小沢書店、1996 年、p.14
（9）村上哲見『科挙の話』講談社学術文庫、2000 年、p.92
（10）李徴の場合、「典型的な出世コース」の最初にある「校書郎」などの役職を経ずして「尉」に任じられているが、これは抜擢人事であったのだろうか。
（11）小森陽一『大人のための国語教科書――あの名作の“アブない”読み方！』角川書店、2009 年、pp.194-202
（12）村山、前掲書、p.9
（13）小島晋治・並木頼寿監訳『世界の教科書シリーズ⑤　入門　中国の歴史――中国中学校歴史教科書』明石書店、2001 年、pp.357-358
（14）人民教育出版社歴史室編著（小島晋治他訳）『世界の教科書シリーズ⑪　中国の歴史――中国高等学校歴史教科書』明石書店、2004 年、p.172
（15）久米旺生訳『中国の思想 9　論語』徳間書店、1973 年第 2 版（改訂増補）、p.157
（16）久米、同書、p.68、p.115
（17）小森陽一『〈ゆらぎ〉の日本文学』日本放送出版協会、1998 年、p.243
（18）村上哲見『科挙の話』講談社学術文庫、2000 年、p.63
（19）関良一「「ギリシア的叙事詩」と「山月記」について」、『言語と文芸』第 42 号、1965 年 9 月、p.65
（20）中島敏夫『中国の名詩鑑賞 5〈盛唐〉』明治書院、1978 年、pp.6-7
（21）中島、同書、p.8
（22）伊﨑孝幸「晩唐の詠物詩」、『中國文學報』第 73 号、2007 年 4 月、p.40（伊﨑の論文は旧漢字を用いているが、引用するにあたって新漢字に改めた）
（23）伊﨑、同論文、p.40、p.41、p.42
（24）伊﨑、同論文、p.44、p.48
（25）前野、前掲書、p.23
（26）伊﨑、前掲論文、p.46
（27）盛唐期において、「事あるごとに詩を作るという（略）習わし、さらに人々の間でことごとに詩をやりとりする習わしは、宮廷の枠内にとどまらず、知識人一般にすでに広く普及していた」と中島敏夫は述べてもいる（中島、前掲書 p.8）。
（28）前野、前掲書、p.13
（29）李徴の文名が「容易に揚がら」なかったのはなぜか、という問題については、拙稿「『山月記』再読――科挙の門をくぐった男･李徴の物語――」（『中央大学国文』第 54 号、2011 年 3 月）でも論じた（「第 3 章　詩人に成りそこなった男」）。
（30）中島、前掲書、p.8
（31）松村良「エクリチュールの復讐――中島敦『山月記』――」、勝又浩・山内洋編『近代文学作品論集成⑩　中島敦『山月記』作品論集』クレス出版、2001 年、pp.300-301
（32）中島、前掲書、p.9
（33）蓼沼正美『超入門！　現代文学理論講座』筑摩書房（ちくまプリマー新書）、2015 年、p.221
（34）蓼沼、同書、p.222
（35）蓼沼、同書、p.222
（36）内田泉之助・乾一夫『新釈漢文大系 44　唐代伝奇』明治書院、1971 年、p.184、p.185
（37）「現行学習指導要領」、『文部科学省ＨＰ』（http://www.mext.go.jp/）

(38) 小森、前掲書、pp.194-202
(39)『教科書ガイド　第一学習社版　高等学校　現代文Ｂ　完全準拠』文研出版（発行年月日未記載）、p.23
(40) 石原千秋『国語教科書の思想』筑摩書房（ちくま新書）、2005 年、p.25
(41) 林和利「野村萬斎「敦――山月記・名人伝」」、増子和男・林和利・勝又浩『大人読み『山月記』』明治書院、2009 年、p.119、p.121
(42) DVD『敦　山月記・名人伝』WOWWOW、2006 年
(43) 勝又浩『Spirit　中島敦』有精堂、1984 年、p.68
(44) 勝又、同書、p.69、p.68
(45) 斎藤哲也『読解　評論文キーワード』筑摩書房、2013 年、p.100
(46) 拙稿「『山月記』の言説分析の試み――人間＝李徴が失ったもの、虎／李徴がたどり着いたところ――」（『中央大学文学部紀要』文学科第 87 号、通巻第 184 号、2001 年 3 月）で分析したように、第 2 形式段落以降においては、語り手が袁傪の位置から出来事を捉えたり、袁傪の内面を語ったりする言葉はあるが、語り手が李徴の立場で出来事を描写したり、李徴の内面を直接的に語ったりする部分は、一つもない。
(47) 学校案内パンフレット『中央大学附属中学校・高等学校　2019』、p.11
(48) 石原、前掲書、p.64
［付記］『山月記』からの引用は、授業でテキストとして用いた『現代文Ｂ』（三省堂、2014 年初版、2017 年 4 版）に拠った。また、できるだけ授業で扱った資料から引用するようにしたが、授業で用いなかった資料から引用した部分もある。